

---

# 陸を渡った人魚姫

まめ太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

陸を渡った人魚姫

### 【Nコード】

N3447T

### 【作者名】

まめ太

### 【あらすじ】

現在は閉じているHPで発表した作品の、ほんの一部を再公開。

あつたのかも知れないし、なかつたのかも知れない。  
真実は、不死の魔神たちのみが知る。

ダイトーが、まだダイトーとは呼ばれていなかった頃のお話。  
その大きな国の見目麗しい立派な王子は、船に乗り、南の国を見聞に出た。

勇敢で賢い王子だったので、どの国に着いても歓迎された。  
そんな有る日、王子の乗った船は嵐に会い、人々を乗せたまま、海に沈んでしまった。

王子は力の続く限りと泳ぎ続けたが、ついには力尽きて海の底へと沈んでいった……。

その手を引いたのは、一人の美しい人魚だった。  
人魚は一目見るなり、王子の虜となり、急いで陸へと連れ戻った。  
水を吐かせ、息を吸わせ、清水で喉を洗ってやって……そうして王子は気がついた。

けれど、王子の言葉は異国の言葉。人魚には理解が出来なかった。  
同じように、人魚の言葉も王子には解からないものだった。  
命を救った恩人のこの人魚を、王子はとても慈しみ、二人は愛を育んだ。

言葉は通じなかったけれど……心でそれを補った。  
やがて王子の帰る日が出て来た。  
大きな船に、大きな風呂桶を積んで、王子は人魚を連れて帰った。

人魚は産まれて初めて陸を渡った。

「王子様、見るもの全てが初めてです、  
なんて広い大地、なんて広い緑、なんて広い空……  
ああ、この木々の連なりはなんですか？ まるで、海のように……」

「それは森、と言うのだよ。」

森　森？　そう、森。　何度も何度も同じ言葉を繰り返し、二人で言葉を重ねあい、そうして「森」を心に刻み込む。

人魚は少しずつ王子の言葉を喋り出し、王子は少しずつ人魚の言葉を理解した。

あれは牧場。　牧場？　そう、牧場。

辛抱強く、ゆつくりと、二人は愛を育んだ。

王子の国に着く頃に、人魚は魔力を使って尾びれを足に変えてみた。とても多くの力を使ったけれど、王子はとても喜んだ。

人魚の魔力は特別のもの。とても大切なもの。それを、王子と同じになるために使った。

「姫、私の傍に居ておくれ。」

私の傍で微笑んで、私の子を産んではくれないか？」

王子は人魚を妃に迎えた。人魚は姫となった。

とても仲睦まじい夫婦になった。

賢い王子と美しい姫、やがて姫は身籠った。

けれど姫は日に日に悲しく打ち沈み、体もなんだか痩せてしまう。

「どうしたのだ、姫？　早く元気にならなければ・・・お腹の子供にも悪いだろう、」

王子は心配し、多くの医者に見せるものの、返る答えは滋養を付けねば、の一言だった。

けれど、人魚は何を食べても満足しない。

ますます痩せ細ってゆくばかりだった。

元気がない姫のために、王子は船を用意した。

大きな船。沢山の人が乗り込み、パーティを開いた。

「さあ、姫。城に居るばかりでは、ますます気が滅入るだけ。

そなたの為のパーティだ、何でも自由に食べるがよい。」  
船の甲板にはテーブルがいっぱい。

テーブルの上には大きな皿がぎっしり。  
皿の上には美味しそうな料理がこんもり。  
人々もさざめきながら、御相伴。

「さあ、姫。遠慮なさらず、」  
口々に勧めた。

「何でも、お好きなモノを。」

姫はたまらず、喉を鳴らした。

とてもお腹が減っている。色んな皿から色んなお料理。ちよつと食べ、ちよつと飲み。

やがて姫は皿を置いた。

海の色は、どこの国も同じ色。人の体もどこでも同じ。

髪が生えて、手足があつて、鼻がひとつに目が二つ。その中に、ほんの少しの魔力。

ああ・・・、とても足りない。

姫は悲しく涙した。

「どうして泣くのだ、姫。」

ほら、お腹の子供も心配しているぞ？」

王子は優しく姫のお腹に耳を寄せた。とても大きな魔力。

「王子様・・・実は、王子様・・・」

姫は全てを話そうかと訴えかける。けれど、それは言えないままで口を閉じた。

「今度、パーティを開く時は、三人になるのだな・・・」

王子の言葉を聞いてしまって、言えなくなつた。

嵐の夜、この魔力に惹かれて、王子様を見付けたのだ、とは。

この魔力に惹かれて、伴侶としたのだ、とは。

「さあ、夜風に当たるのは良くない。

もうお休み。」

王子は姫の手を引いて、船の自室へと連れて戻つた。

真夜中に、姫はこっそり、抜け出した。

・・・とても足りない。

この二本の足を作るために、大事な魔力を使ってしまった。たとえ、王子が承諾してくれても、それでもまだ足りなかった。

人魚は伴侶を食べてしまう。子供を産むために、そうして子供を産んだ後には食も取らずに子供を守り、力尽きて死んでゆく。

子供のための一生。けれど、それは人魚の姫の国の事。

「王子様は大切な方。」

この国に必要な方、・・・私の国とは全てが違う。」

姫は小さく呟いて、こっそりと廊下へ出た。

そうして、本当の姿に戻った。

五人・・・いえ、四人で足りる。

四人の人に協力してもらおう。姫はずるずると移動する。

ベル・ボーイに出くわした。

恐怖に引き攣った顔、あまりの事に声も出せない彼を飲み込む。

あっという間に、たぶん、と消えた。

人々が恐怖の叫びを響かせた。

騒がないで、騒がないで、王子様が寝ていらっしやるの、

誰か、あと三人でいいの、

姫は必死に願ったが、その声を理解出来る者は居なかった。

人々は逃げ出した。

追い掛けて姫も甲板に這い登った。

沢山の人々、散りじりに逃げて、追うとまたバラけた。

逃げないで、協力して、この子達のために力をちょうだい、

姫は必死に追い掛けた。

兵士が剣を抜いて向かってくる。沢山の兵隊たち。

「この化け物め！」

斬りつけられて、悲鳴を上げる。

子供達を守らなければ、大事な子供たち、王子さまの子供、

わたしの大切な、愛する人の子供、  
姫は必死に逃げ出した。

騒ぎを聞いた王子が甲板に駆け上ってきた。  
隣りで眠っていたはずの姫の身を案じて。

「なにごとだ!？」

王子が目にしたのは、虹色に輝くウミウシのような怪物。

「・・・化け物、いつの間にも乗り込んだ!？」

王子は勇敢に剣を抜く。

姫の姿がなかった事が、とてもとても気掛かりだ。

まさか、この怪物が？ 焦りと怒りがなймаぜで、王子は姫に斬りつけた。

なにをするの、やめて、王子様のこともが!

子供たちを守らなければ、大事な子供たち、愛する王子様の、  
姫は必死に逃げ出した。

王子は姫を、ついに船尾へ追い詰めた。

震えるさまは命乞いをするようにも、泣いているようにも見えて、  
王子の心に迷いをもたらす。兵士の声が届いた。

「姫のお姿はどこにも!」

人々の唸りが響く。王子の情けも怒りに変わった。

やめて、やめて、やめて、

子供たちを殺さないで、愛する王子様、やめて、

姫は変身を解けないままで、必死になって訴える。

もう、魔力が残っていない。

あと三人食べなければ、でも、愛する王子様はこの国に必要な人、  
あと三人、誰でもいいの、誰か、わたしに協力して、  
姫は虚しく願いながら、剣を抱いて海へと落ちた。

王子は剣を突き立てた。とどめを刺された怪物は泣いた。

怪物は、姫の言葉でそつと王子に囁いた。

「・・・王子様、もし、わたしを哀れに思い召すなら、どうか、いつか・・・いつの日か、

わたしの元へ、戻っていらして・・・

どうか・・・」

王子はよろけて後ずさる。

怪物が発した、愛しい姫の声。

人魚の姫は海へと落ちた。白い泡が幾重に広がる。

王子は泡を見つめたまま、ただ呆然と立っていた。

そして、涙を流した。

おしまい



(後書き)

昔の作品を発掘したんで再発表。 5年前？  
・・・10年前だったかな・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3447t/>

---

陸を渡った人魚姫

2011年6月28日07時34分発行